発行･編集　朋芽の会事務局／houganokai@live.jp　2009/03/31

第3号　目次

✣第３回理事会

平成21年度　研究主題の決定　p.1

✣例会報告

【実践報告】朗読発表の構想と指導について　笹平真之介　p.2～5

✣お知らせ

平成 21 年度　研究日程　ほか　p.5

❊第３回理事会　2009/03/21（於：東京学芸大学附属図書館）

平成21年度　研究主題

『読むこと』の実践理論研究

第３回理事会において、次年度の研究主題の策定がなされました。次年度は、「『読むこと』の実践理論研究」と題して様々な研究活動を行っていきます。

まず、年度の前期（４～１０月）は「音読」、後期（１１～３月）は「説明文」をサブテーマとし、例会において報告をします。さらに、２月には研究大会の開催を予定しています。

＊

昨今、活用力や伝えあう力といった、いわば「目標」に関するキーワードがあふれています。朋芽の会設立後、初めて迎える新たな年度にあたって、若手教員として私たちは、目標が念頭にあるのはもちろんですが、「内容」を重視し充実させることが必要だと考えました。それで、研究主題は内容から決めることにしたのです。

もちろん「実践理論研究」には、実践と理論の両立という意図が含まれています。どちらか、ではいけないのです。

以上のように、具体的内容と、実践と理論の両立の二点を掲げて、一年目の朋芽の会は進んでいきます。

※例会報告

平成20年度第3回例会

第3回例会は予定通り、3 月 21 日に東京学芸大学附属図書館で行われました。

1 月に朋芽の会が設立され、今年度はわずか3回ですが、2ヶ月に一度という予定を超えて、会を軌道に乗せようと例会も努力して参りました。

今年度最後の例会は、実践報告を本会事務局の笹平真之介が行いました。つい一ヶ月前の実践でしたので、限界も可能性も含めて、まさに今の姿を示していると思います。

【実践報告】

朗読発表の構想と指導について　題材『耳なし芳一の話』✣４年・３学期

笹平真之介

本校では、しらかば祭という学習発表会を行っており、各学年に舞台発表の種類が決められている。第４学年は朗読で、学年 120 名全員での発表をする。今回は、このしらかば祭で発表した「耳なし芳一の話」の指導の構想と実際について報告する。

ねらいと教材の選択

１、文字言語からの脱却　～解釈と表現の創造

文字言語は音声情報を持たない。音声情報を持つとすれば、それは読み手の側にあるといえよう。文字言語による作品を朗読するとなれば、その音声はすべて読み手に委ねられているということである。

そこで読み手は、言語コードにしたがって意味を解釈し、発音とアクセントを整えて発声する（あるいはしようとする）。しかしながら、言語コードにも規定されない部分、読み手による、音量、抑揚、高低、強弱など―「表現」としてとらえられる―も存在する。つまり朗読は解釈であり、表現でもあるのだ。この朗読は、「作品をとらえて、発信する」、二次的創作の活動であると私は考える。

上記のことをふまえて、子どもが学習の成果を発表するに足りる作品の選定、単元の構成を試みなければならない。

加えて、朗読の活動の特性を考えれば、舞台上で用いることのできる効果は、主に音声でなくてはならない。

２、「場」を活かした表現活動

音声による表現、特に舞台上でのそれは、いろいろな要素をもっている。まず空間的な要素で言えば、ここには大いに「場の空気」が関係してくるだろう。120 名という人数では、ただ読み繋ぐとだれてしまう危険がある。単調になってはいけないということである。聴衆を感動せしめるには、まず暗い体育館という「場」を活かし、全体を一人読みあるいは群読だけで構成するのではなく、盛り上がりの効果を群読によって作り出すように考えなくてはならない。

３、子どもの意識づくり

以上のことをふまえて、子どもに意識させたのは以下の点である。

①朗読とは一回きり、かつ唯一の「作品」であること
（つまり、一人一人がかけがえのない作り手であるという意識、のこと）
②舞台上で、「聞かせること」を目的にしているということ
（演ずること、「語り」の延長にあること）
③音声以外の表現の制約と可能性を把握し、活かすこと
（「語り」の特性、演劇との違い）→表情の工夫、大道具の排除

指導の中でたびたび喚起するようにした。

４、作品の選定に当たって

ｉ選定にあたって考慮した点

① 暗い体育館という場を十分に活かすこと

客席が静まっていて、大道具を使わず、雰囲気を作り出せることを考えた。

②「語り」を意識出来ること

この作品の持つ特性として、重層的かつ多次元的な「語り」の構造がある。琵琶法師によって語り継がれるようにつくられた「平家物語」と、その「平家物語」を語る琵琶法師・芳一の物語、そしてその芳一の物語を、子どもたちが語るというものである。

「語り」によって作品を作品たらしめる、いわばよみがえらせる、呼び起こす活動としての「意味」を持つだろう。

実際の指導

１、指導計画

指導は１ヶ月間、３週に区切って計画を立てた。（計 20 時間・特別時間割により増）

週	項目	内容
1	通読	教師が範読する。
	背景知識	【主なキーワード】平清盛、源平合戦、壇ノ浦の戦い、耳なし芳一の話の舞台（壇ノ浦・赤間が関）、小泉八雲、琵琶法師 〈２時間〉
	パート決め	３クラスそれぞれで、パートを決める。オーディション等。
2	演出調整	子どもが話し合い、群読の人数を調整する。発音を指導、矯正。 〈５時間〉
	クラス毎練習	クラスごとに、グループ練習（意見交換）、通し練習。演出指導。 〈５時間〉
3	全体練習	視聴覚室、体育館で学年の通し練習。演出指導。舞台演出。 〈７時間〉

※計画段階のもの。実際は途中、２クラスが２日、１クラスが３日の流感による学級閉鎖となった。（およそ４～５時間減）

［参考資料］

・台本　（児童用・教師が使用したもの）

・練習の記録ＶＴＲ　①学年練習（2 月 13 日）　②本番（2 月 21 日）

２、指導について

ⅰ台本・表記

底本には新潮文庫の「小泉八雲集」（上田和夫訳）を用い、長さと言葉の２点を考慮しつつ、朗読を想定して書き下ろした。平易で、丁寧語の小学生用の底本を用いなかったのは、古語を用い、だ・であるで書かれている方が、子どもの日常会話との差ができ、かつ音声としての区切れがよいため、より緊迫感を生み出せるだろうと期待したからである。

加えて、古典指導を見据え、古語にふれさせたいという意図もあった。現代語に置き換えていない古語は、私の感覚的な選択によるものである。たとえば、「やんごとなし」は現代語では「身分の高い、高貴な」にあたる。これがセリフ中に数カ所出てくるが、初出では『身分のたいへん高いやんごとなきお方』というように、（意味としては重複するが）説明するように工夫してある。

ⅱ構成

全体を３つのブロック（A・B・C）に分け、前の２ブロック（A・B）には一人読みを、最後のブロックには群読を配置した。

一人読みの長さはまちまちで、およそ２文になるように分けた。群読は、一人に一度は出番があるようにした。（参考資料：台本　参照）

ⅲ演出

今回の目的には、「子どもの読みの表出」があったので、通読の際に範読はしたものの、私は最初から表現の如何については特にふれなかった。そのかわり、物語全体に対する部分として自分のパートがあることを意識した上で、何度も読み込むようにさせた。

一度「どのように読むか」を書かせようかとも考えたが、書かせたものによって子どもの意識が固定化されてしまうと、自由に工夫を変化させる上で支障になると考えて取りやめた。結果的に、「自分の読み」と「全体の読み」を柔軟にすりあわせることに繋がったのではないかと考える。それほど子どもたちの読みには、日に日に変化していったのである。

もちろん、発音とアクセントについての指導を行った。そこから一歩踏み込んで、抑揚についても口出ししたが、体育館の音響を考慮した上で、あくまで私の感覚で指導を加えている。

群読については、主に一人読みの抑揚、強弱、大小に対応するところを、人数によって表現しようという試みであった。小学４年生であり、実際の子どもの声を勘案しても、男声・女声の区別は不要と判断した。

部分の群読の人数は、あらかじめ目安を決めておき、子どもたちが練習する中で変更を加えた。子どもから提案して変更する場合や、体育館の練習になってから増員した場合もあった。（参考：台本）

指導を終えて

例年の四年生の朗読は、主に童話作品、民話、落語など、教科書に載っているもの、準ずるものだった。昨年度は「どんぐりと山猫」（宮沢賢治）、一昨年度は「じゅげむ」（落語）で、どちらも教科書関連の作品である。

そのなかで急にジャンルを変え、しかも怪談で臨むということは大変勇気の要ることに見えたらしい。しかしながら、過去の実践が、見せることに執着しすぎてはいないか、という疑問はあったものの、「朗読」の本質から出発することが最大の目標であったので、その意味で私の立場ははっきりと示せたように思う。（表現の工夫については、これまでの記録（台本・VTR）を研究したことは付け加えておく）

私は、今回の活動を「読み」という視点でも捉えたが、それに関しての指導を怠っている。子どもの読みに対して関われたとすれば、背景知識を重視し、歴史的背景を与えたことぐらいであろう。主に今回子どもの活

動として効果があったとすれば、読みつなぐ中で、子ども同士の読みの交流が自然になされていたことである。「前の人の雰囲気を引き継ぎつつ、自分なりの表現をする」―私が子どもに期待したことはおそらく難しいことであったろうが、子どもは果敢に挑戦してくれた。

あるいは、子ども同士の学び合いについて教師が意図し、仕組み「過ぎる」ことがよくないのかもしれない。必要なのはシチュエーションを作り出すこと（だけ）ではないか。教師が関われる領域とは如何。

最後に、私は「自分のパートは暗記せよ」と言ったものの、結局子どもが物語のほとんどを暗記してしまった（暗記して臨んだ？）ことに驚きを感じたことを報告して、締めくくりたい。

［参考文献］
しらかば祭実践記録　国立学園小学校国語部（H17～19）VTR・台本（その他、複数年の台本）
音読・朗読・群読　第 18 回東京学芸大学公開セミナー（1997.7）
小泉八雲集　新潮文庫刊　上田和夫訳（1975）

［ささひら･しんのすけ　国立学園小学校］

※お知らせ

○平成 21 年度研究日程
前期【**音読**】（５月、８月、９月、10 月）
後期【**説明文**】（11 月、１月、２月）

○次回例会のご案内
平成 21 年度第１回例会
日時：５月９日または 10 日　午後１時３０分～
場所：東京学芸大学附属図書館

Copyright©2009 HOUGANOKAI all rights reserved.